

きるのが、やっぱり中学よりも高校の方がやりやすいよってというお話があったんですけど、中学高校っていう感じで言ってたので、(大学)3年次よりは小学校教員やりたいなって気持ちが多量はあったとしても、やっぱり小学校だって感じてはなかったと思います。」

しかし、より子細に検討加えると、この判断の背景には自身が健康面の不安を抱えているという状況等もかかわっていることがわかる。Hは、午後5時か6時に帰宅して、体調を整えられるという点を重視した結果であると説明を加えている。教職に就きたい気持ちはありながらも、現在の教職をめぐる状況では実際の就職先として選択するにはリスクが伴っているという判断である。同じような不安は、Eも抱えていた。このあたりの事情を以下のように語っている。

「…教職を選ばなかった理由の一つに、自身の体調面とか精神面とかそういった部分に関係してまして、そこでちょっと今教職に就くのは何か危ないと言ったら何ですが。こう色んな意味でリスクが高いなと思って、一度民間に行ったあとで、そういった体調面の落ち着きとか、労働環境が整ったというのがもしあれば、将来的にそのいわゆる正規というか常勤じゃなくても非常勤みたいな形で勤めることは考えていますね。」

種々の経験をふまえて、自身が教職に必要であるとイメージする「力」を身につけられないという反省的視点に立ち、教職を選択しなくなるという例も見られた。Gは、以下のように語っている。

「私の性格的に、アドリブ力が自分にはないというふうに思ってた、まだ足りないなっていう風に思ってるんですけど。教員はやっぱりそのアドリブ力がすごい必要になってくる。一方で、公務員はもちろん、そのアドリブが必要な場面もあるとは思いますが、コミュニケーションにアドリブが必要かというよりは、事務作業として必要なので、考える時間があるというか。その即興で色々考えたり話したりしなくていいというので、私にすごく向いてるなっていうのが、教員と比較した時の公務員というか、公務員の事務職の魅力かなって思ってます。」

職業適性を見つける「科学的検査」が活用され、事前に自らの適性を見つめることを求める時代状況において過剰に自己チェックをする傾向があることは否定できない。そのような後期近代の特徴も含めて、これまでのような教職への単純なライフコース選択はできにくくなっているのかもしれない。

とはいえ、困難さは個人の実体化された能力というよりも、若手教員が置かれた環境その